

# 『ロティの結婚』はどのように作られているか

末 松 壽

異国趣味の文学の巨匠であり、かつ稀代の、もしかしたら19世紀最大の流行作家でもあったピエール・ロティ (Pierre LOTI) を取り上げる。まずその文学活動を全体的に規定するかと思われる一つの事件を語ることから始めよう。

## プロローグ：原型としての初恋

ジュリヤン・ヴィオ (Julien Viaud, 1850-1923) にとって、16歳のときに体験した初恋は重要な事件となる。クロード・ギャニエールによれば、相手は「テラ・コッタの肌をもち、豊かな黒髪を色つきのピンでとめた」ジプシーの娘で、場所は「ロッシュ・コルボン (Roche-Corbon) の城をとりまく日陰になった窪地の一つにある洞窟の苔むした地面」<sup>1)</sup> であった。批評家は典拠をあげていないのだが、思うにロティ本人の日記にでも由来する情報であろう。

「恋の祝祭はかろうじて一週間しかつづかず、ある朝ジプシーの野営地が空になっているのを発見した少年のながす滝のような涙のうちにそれは終わった」という。しかしこの体験は彼の心にふかい刻印をのこすことになる。心理学の用語を借りれば、いわゆるトロマトィスムを語ることができよう。じっさい、

これをもって彼は、とギャニエールは書いている。彼のあらゆる他の恋の原型とした。すなわち肌の色が異なり、自分より地位は劣り、文化も民族もちがう女性、(...) コミュニケーションを妨げる言語の壁。始まったばかりの情熱は、避けられない終局へ向けて走る。事件は一方の出発によって完結することになる。あらゆる出発のなかでもっとも確かな出発である死によるのでなければ<sup>2)</sup>。

その後の恋は、いずれも同様の経過をたどるというのである。ということは、「ロティの恋愛はその結末においても、その病的な別離の享楽においても、永続する悔恨の苦しみにおいても、どれもこれも似通っている」(同上)ということに他ならない。読者はしかし、ギャニエールの言葉が、純粋にジュリヤンの人生体験についての観察なのか、それとも同時にロティが一人称で描いた多くの作品における恋愛の形についてのそれなのか、と問いたくなるであろう。と

いうのは、彼の二三の小説を読んだ者は、批評家の観察が小説についても当てはまることに気づくからである。じっさいそれは驚くべきことである。言い換えれば彼においては、実人生における恋愛事件は初恋と同様の経過をたどるし、作品の物語もまた同様の経過をたどるように思われるのである。この人物について我々は、作品と人生とがほとんど区別がないかのように描かれまた生きられたかのごとき印象を受けるのである。果たして事実はこの印象を裁可するのだろうか。今はまだクロード・ギャニエールの指摘を紹介するにとどめて、『ロティの結婚』に接近しよう。

## I

### 『ロティの結婚』解題

*Le Mariage de Loti* (『ロティの結婚』) は、まず *Rarahu* — 他の読み (ララユ、ララフ) も不可能ではないが、筆者はララヒュを採用する — というタイトルで、ジュリエット・アダマン (J. Adam, 1836—1936) の創刊した雑誌 *La Nouvelle Revue* (『新雑誌』) に4回にわたって掲載された。1880年1月1日、1月15日、2月1日そして2月15日である。これはタヒティを舞台とする一種の「小説」で、ララヒュはその女主人公の名前である。

改定・削除の後、それは新たな標題を冠して同年3月に単行本として出版された。著者名の代わりに「アジャデの作者による」と記載されていた<sup>3)</sup>。1879年に匿名での出版をみた『アジャデ』とは違い、ただちに「目もくらむような」大好評を博した。時にジュリヤン・ヴィオは30歳であった。

その前、彼は1871年3月15日から一等見習士官 (*aspirant de première classe*) として、護衛艦ル・ヴォドルイユ号、次いで快速艦ラ・フロール号で、南米を経由して太平洋—イースター島、タヒティ、ハイティ、サンフランシスコ—を一年半にわたって巡航し、ブルターニュのプレストにもどったのは1872年12月4日であった<sup>4)</sup>。タヒティに取材した『ロティの結婚』は、ヴィオの実際の現地滞在から8~9年後の出版となった。

### 筆名の由来

ところで筆者は、「同じ」人物のことをピエール・ロティとも呼び、ジュリヤン・ヴィオとも呼んできた。どういうことなのかを釈明しておかなければなるまい。

『ロティの結婚』の主人公で、同時に一人称の語り手でもある一つまりこれは「自伝」形式の作品である一人物は、大英帝国の海軍軍人（正確には「midshipman」、海軍士官候補生<sup>5)</sup>で、本名はハリー・グラント (Harry Grant, I, iv, 137 ; I, vii, 139) という。形式のみならず内容から見ても自伝的な作品と推測されるとはいえ、早速このような改変もあることに気づく<sup>6)</sup>。ところで、このハリー・グラントという語はタヒティ人の舌では発音しにくいというので、作品冒頭に位置する1872年1月25日とされる彼の洗礼に際して、現地の三人の女性（王女および二人の侍女）が彼につけたニックネームがロティ (Loti. 実は Roti であるという指摘もあるが、これはフランス語を知る者にとってはもちろん採用できない) で、バラないし夾竹桃を意味するという<sup>7)</sup>。

標題が『ララヒュ』から『ロティの結婚』に変わったこと、出版に際して著者の本名は明かされていないこと—海軍の規律と関係があると思われる。海軍軍医であったセガレンもまた最初は筆名を使用する—、また作品が大成功を見たことはすでに述べたが、ジュリヤン・ヴィオは以後、ロティという登場人物のしかも綽名を自分のペン・ネームとして採用することになる。実際、翌1881年に公刊する *Le Roman d'un spahi*<sup>8)</sup> では、この Loti に数年前から用いていた名である Pierre を加えて署名するのである<sup>9)</sup>。

## II. 制作と構成

### 要約の困難さ

先のクロード・ギャニエールの指摘にならってごく短く要約すれば、あるイギリス人の海軍士官候補生がタヒティで現地の娘と同棲し、しばらく経って単身帰国する、というのが『ロティの結婚』の物語ということになる。しかしほんの少しでも詳しく語ろうとするならば、とたんに困難になる。

批評はそのことをよく知っていて、彼の作品を次のように評価しているのである。

それにそもそも、これらの構築のない、終りも初めもない文書に「小説」という名称を与えるのは適当であろうか。それらはロティが一生のあいだ毎日書いていた日記—そこに彼は小さな文字で、船乗り稼業のあらゆる出来事、出会い、色恋、時が過ぎてゆくことへの恐れ、死の恐怖、ノスタルジー、後悔などを書きつけていた—から、そのまま抜き出されたかのように感じられるのである<sup>10)</sup>。

指摘を個条にまとめれば、

- 1) ロティ（あるいはむしろジュリヤン・ヴィオ）は日記を書いていたこと。
- 2) それを作品に利用したこと。それもほとんどそのままのような印象を与えること。批評家は日記と「作品」との内容が似通っているというのだが、書き方や構成の仕方、あるいはいわゆる形式についてはどうなのであろうか。
- 3) 物語の構築あるいは筋の作り方が緩いこと。「初めも終わりもない」という指摘は、無論ロティの作品がアリストテレスの『詩学』の理念、そしてフランス古典演劇の理念、それを多かれ少なかれ踏襲した小説美学からかけ離れた作法を見せているということに他ならない。これらの点については後で検討することにするが、今は、ほぼ同様のことを指摘しているバルトの面白い言葉を引用しておこう。

語られるのは事件 (une aventure) ではない。些細な偶発事 (des incidents) である (...)。日々の織りなす連続体のうちにもたらされる軽い消え去っていく襲。ほとんど書きとめられないようなもの、いわば零度の記述、ほんの何かを書きうためののみ必要なもの、である。ロティもしくはピエール・ロティはこれらの無意味作用 (insignifiances) において優れている<sup>11)</sup>。

しかし誇張してはなるまい。もちろん明確でも強固でもない筋にとって無関係の些事がいくらかでも記載されるとはいえ、厳密な意味で物語にはまったく軸がない、始めも終わりもない、とは言えない。なぜなら物語は、タヒティ到着の日、宮廷に表敬訪問した船の提督によって、ハリー・グラントが女王ポマレ四世に引合されるところから始まることに異論の余地はないからである。そのとき提督は、彼のことを「陛下の麗しい国で4年間生活した海軍士官ジョージ・グラントの弟」<sup>12)</sup> だと紹介する。(ちなみにジュリヤンの実兄は海軍軍医としてタヒティに滞在した。その後、マラリアや赤痢やコレラの蔓延するメコン川の河口近くに派遣され、2年後に帰国の船中で病死している)<sup>13)</sup>。女王はひどく懐かしがられ、ハリーにまた会いに来るようにとのお言葉を下さる (I, vii, 139)。こうして、ロティはポマレ女王の宮廷に出入りするようになるのである。そして時間的にはこれにララヒュとの出会いがつづく。

## 日記と「小説」

物語の終わり方について考える前に、小説作品と比較されているジュリヤン・

ヴィオの日記が物的な意味においてどのように作られているのかを知るために、日記の編集者の証言を参照する。興味ぶかい記述なので、あえて長い引用を行いたい。

この日記が製本されたことはない。何千枚の用紙は一般に160mm×200mmのサイズで、四つに折られ、日記作家はしばしばその1面か2面しか用いていないのだが、大きな白い紙挟みに年毎に集められ、それも6ヶ月単位で1月から6月、7月から12月と纏められていた。ロティはこれを再読した後、半年分の束をつむむ用紙に「*bitm*」(bitmichのこと。トルコ語で「終了」を意味する)と記載して、挟んだ資料の再読および保存措置を完了した旨表していた。ロティは日記のページの間に多数の手紙〔彼自身の手紙の下書きをふくむ〕を、また新聞雑誌の記事、招待状、外国語(マオリ語、トルコ語)の単語リスト、電報、業務上の覚書、クリーニング店の伝票、アラビア語とかトルコ語の文字の練習をした用紙を挟みこみ、こうして生の日記のテキストから自分の生涯の文書を作りあげるのである。これら外来の要素は、最初と最後のそれぞれ数年間についてはすこぶる多い<sup>10</sup>。

日記の実物に関するこの証言を通じて、我々はヴィオにおける絶大な自己への関心、生を保持する熱意、あるいは「失われた時」をふたたび生きるのではなく日ごとの生を失うことへの恐れとか嫌悪のごときものを推測できるだろう。だが、問題はこの日記と作品との関係である。彼はどのように日記を作品化していくのか。

ギャニエールが二種類のテキストにおける記述内容の類似を語っていたのに対して、日記の編集者たちは上の観察の後で次のように述べて、テキストのタイプにかかわる特徴とそれに由来する様相の類似を指摘する。

『アジャデ』から『貧しい若い士官』まで、ロティの多くの本は(...)書簡、新聞の切り抜き、様々の文書資料のコラージュによって得られるところのこの同じ雑然とした様相を呈している。書記実践と等質の断片の美学である。(Ibid.)

眺めれば分かるテキストの断片性はいうまでもなく、筆者自身もまた作品に「雑然とした」(*hétéroclite*)という印象をいだいていることを告白する。しかし日記と作品との生成関係を具体的にみるために、ロティ自身の振る舞いを観察しなければなるまい。ここに『イースター島』の起草を説明し、作家の誕生を語る長い逸話がある。

一年半に及ぶ南米経由での太平洋への巡航については先に述べたが、その航海のときジュリヤン・ヴィオはイースター島に1872年1月3日から7日まで4

日間滞在している。その4ヵ月後に、彼は姉のマリー（1831年生まれで、19歳年長）に、島で描いた一連のデッサンを送り、これを絵入りの雑誌に掲載してもらおうと依頼する。「デッサンには、と彼は書く。かならず記事をつけなければならぬと聞いた。姉さんこれを書いてくれるよね」<sup>15)</sup>。彼はデッサンに英語およびスペイン語の資料のフランス語訳を同封する。そして更にこう続ける。

それに加えて、かの地での滞在中、僕が毎日、出来事〔incidents. パルトも用いた語〕を極端に綿密に細部まで書きつけておいた帳面を送る。これらすべてを、姉さんらしく手際よくほぐして、きっと欠落するところのない興味をそそる記事を書いてくれよ。この国は今日まであまり知られていないんだから<sup>16)</sup>。

姉はこうして弟の日記やその他の資料をもとにして問題の「記事」を書いた。そして報告全体はジュリヤン・ヴィオの署名のもとに、彼のいくつかのデッサンによる版画つきで、その名も *L'illustration* 誌の三つの号（1872年8月17, 24, 31日号）に掲載された。

これがまもなくロティと署名することになる「物書き」の処女作である。彼の旅行記を編集・出版したクロード・マルタンは以上の事実を伝えながら、今日とは異なる当時の文化状況のことを思い出させている。批評家によれば、1872年の報告の作者は「作家ではなくリポーター、それも図像リポーターである」と言う。デッサンは芸術作品としてではなく、記録、資料としての意味があったのだ、と。当時写真はまだ広範にいきわたっていません、ジュリヤンがノートしているように「船中で写真をとる者など誰もいなかった」（同上）。事実、後に発表される紀行文『イースター島』の文章を読めば、滞在中の1月5日に船に残る番にあっていたジュリヤンに艦長はことさらに上陸を命じていることが分かる。「神殿の正確なクロッキーを作ってきて」という命令であった。著者は書いている。「この遠征の間に、デッサンができるということがどんなに僕の役にたったか驚くほどである。このようにして走りまわりにゆく許可をうるなんて」<sup>17)</sup>。翌6日には、今度はあの巨像ティキのデッサンを頼まれる。デッサンは今日の写真と同じ機能をはたしていたのである。

関連的に、クロード・マルタンの指摘するように「デッサンに伴うテキストは二次的な重要性しかなく」、それゆえジュリヤンはそれを姉にまかせた。そして記事は彼の作品とみなされた。つまり文章は言ってみれば、図像の説明文（キャプション）に近いものに過ぎなかったのである。批評家は言う。「ペンよ

りはまず目があった。ペンはあるにはあったし、ますますあるようになるとはいえ (...) このペンは目のように機能するのである」<sup>18)</sup>。このような指摘は、ロティの文学における純然たる狭い意味での説話、すなわち事件や行為にかかわる語りではなく—すでに我々はロティにおいて物語性は希薄だとする指摘を読んだ—、感覚にかかわる描写、とりわけ視覚的なものの描写に注目してみるという思いつきを与えてくれるのではないだろうか。

ともかく、イースター島に関するテキストはずっと後になって再び見直され、訂正を受け、今度はアカデミー会員ピエール・ロティの名前で1899年3月15日、『両世界誌』に発表される。そして更に2ヵ月後、ロティはこれを様々な文章を集めた著書 *Reflets sur la sombre route* (『暗い路上の照り返し』) に収録する。これら二つの段階のいずれから入るのか筆者には分からないが、作者はテキストに一種の序文でもあれば献呈の辞 (アルベール・ヴァンダル宛) でもある文章を添えている。その後半部に注目しよう。

私はかつてごく若い頃そこ [イースター島] に、帆付きの護衛艦で接岸した。暗い雲のたれこめた風のつよい数日間だった。半ば幻想的な国、夢の土地の思い出が残っている。

海軍少尉候補生のノートに、私は日ごとに当時の印象を書きつけておいた。それはひどく脈絡のない子供っぽいものであった。この子供の日記を、そこに欠けていた精確さを与えるよう努めつつ、以下に翻訳した<sup>19)</sup>。

ロティが日記をつけていたこと、そしてそれを「作品」に取り込む習慣があった事実を確認することができる。日記こそはロティにとって優れて作品製作の素材であり、練習であり手段であり、場合によってはすでに下書きでもあっただろう。

さて、『ロティの結婚』の物語の特徴の考察にもどり、それがどのように終わるのかを観察しよう。

### 物語の終わり方

宮廷に出入りするようになったグラントは、女王ポマレ四世から、一応国はキリスト教の社会になってはいるものの、14、5歳の少女ララヒュとタヒティ風の結婚をしては、とけしかけられる。「タヒティ風の結婚」(un mariage tahitien) とは、その点ではかつてプーガンヴィルにヒントを得たデイドロが、誇張もし歪曲もしながらある程度真実をうがった物語をあみ出していたのだが<sup>20)</sup>、イギリスの影響でキリスト教化される前からの伝統の名残である緩やかな一夫

一婦の同棲を意味する。タヒティはすでに異質の二重の制度が共存するいわゆる混成文化の国なのである。ロティ自身は次のように説明している。

とても聡明で思慮ぶかい方である女王は、生涯にわたって縛りつけるヨーロッパの法律にしたがう意味での結婚を僕に提案なされたのではない。この方は国の自由な風俗に対してすこぶる寛容であらせられた。それをもっと正しくし、かつもっとキリスト教の原則に合致させようとししばしば努められてはいたのだが。(I, xiii, 143)

ロティとララヒユとの関係の場合には事実上三つの条項にまとめることができる。1)ララヒユはロティ以外の白人とはつき合わないこと。これは幼な妻本人の自発的な決定である。2)しかし土着の者とは交わることがあるらしい。ロティはそれに感づきながら知らぬ振りをする(II, xxxv, 205)。以上二つの点には奇妙な人種感情が関係していることを記憶しておこう。3)最後に、彼らの同棲はいつかはロティの出発によって終わることが暗黙の前提になっていること、である。じっさい物語は彼らの離別によって終わることになる。もしくは一旦は終わる、と言うべきか。というのももっとも短い第4部は、その後日談ともいうべきもので、ララヒユの亡くなった事をロティが後に人づてに知るのである。こうして作品は完全に終結する。つまり「終わり」もまた確定されないことはない。

## 二重の比較

問題はしかしアリストテレスのいわゆる「半ば」がロティにおいては独特のあり方をもつという点であろう。それを構成するのはまさに雑多な生活の出来事、身辺雑話であり、それらは初めと終わりに対して緊密な関係をもたない。それらの間に連続性もない。「半ば」のもつ雑多な性格といえ、『ペルシア人の手紙』が思い出されようか。しかしある意味で相似ていながら、両作品には相違もある。モンテスキューは、フランス社会を批判的に吟味するために、フランス人読者に向けて社会や文化の多様な面を、様々の人々を興味のおもむくままに次々と読者に提示してゆく。それらの多くは、同時代の読者たちが多少とも知っていることである。ただその見方が異化の手法のおかげで一見エキゾチックなのであった。

その反面、ペルシア人自身のパリでの生活は大して具体的には描かれない。例えば言葉も十分には使えないはずの異国にしかも孤立して生活する者にありがちな様々の場面での困難、不可解な事柄との衝突とか、人格が縮小してしま



うと感じさせられるコミュニケーションの不全、孤独感—移民者や亡命者を語るまでもない。留学生もこれを知っている—とかが皆無なものには驚くほかない。彼らは抽象的存在、いわば純粹な目あるいはむしろ身体なき知性である。

それに対してロティの場合には、異国で生活する人の見、聞き、体験する事柄の報告である。つまり対象がエキゾティックなのであって、見方のほうはむしろ読者に共通でないとしても少なくとも彼らの共感をよぶ体のものである。それは王室とか宮廷とかにかかわることも多く、したがって確かに物珍しくはあるだろうし、作品が大成功を博した事実は一面ではそのことに読者が反応したということであろうが、結局は身近に日々起こる茶飯事なのである。それらをやってくるままに（のごとく）、時には過去をふり返り、時には立ち止まって分析し、あるいは将来に思いを馳せながら—これまたやってくるままに（のごとく）—書きつけてゆくのである。それはまさに日記の書き方でなければ何であろうか。

新聞やラジオやテレビジョン、いわんやインターネットなどの無い社会のことである。記載されるのは、噂もふくめて「私」の身体をとおして体験したことに限られる。ヴィオは、タヒティについて、兄に由来する情報さらには書物（旅行記など）の類を通じて前もってかなりの事柄を知っていたに違いないのだが、それらをロティが明示的にそれとして再利用することはあまり無い。あたかもそのような知識はもたないかのような書き方である。例外的にボマレ女王について「その名はかつて僕の子供時代のエキゾティックな夢に混じりあっていた」（I, vi, 139）と、また兄のかつての愛人タイマハについても「子供時代に僕が夢想し、ルエリ〔ジョージのタヒティでの名〕の遠い詩的な思い出にむすびついていた」（II, xxxvii, 207）と告白しているが、いずれも具体性のない昔日の夢想の記憶でしかない（cf. I, xxii, 151）。したがって、記録される事柄はおのずから限定されざるを得ない。狭い世界である。

しかしその反面、体験の報告には一種の現実感、臨場感そして異郷感（*dépaysement*）—『ペルシア人の手紙』がオリエントではなくパリやヨーロッパを話題にするとき、そこに惨くも欠けている特徴—を感じさせることは確かである。とはいえ、ロティは故国を懐かしむわけではない。ただ一度、ララヒュの友を訪ねてパペエテを遠く離れたパペウリリに旅をした夜、遠くから葦笛の嘆くような音色と法螺貝の陰気な音が響いてきたとき、「故郷からの恐ろしいばかりの距離」を思い、「そして未知の感情に僕の心は締めつけられた」（II, xii, 185）と書いてはいるが、これとてもフランスへのノスタルジーではない。

ロティの書き方は、これをアリストテレスの主張と対比することによって、もっとよく特徴づけることができるだろう。それが『詩学』の理念からほど遠く、(おそらくプレヒトよりももっと強い意味で)「反アリストテレス詩学」と呼ばれるに相応しい制作法であることがわかるだろう。この比較は、ロティをある意味で西洋における文学理論の空間に位置づけることにも役立つだろう。

『詩学』第23章は、叙事詩についてそれが悲劇の場合とまったく同じように、「始めと半ばと終りをそなえた一つの全体的にして完全な行為」(1459 a 19-20)を物語らなければならない、と言う。ここで「完全」とは完成とか最高水準という意味ではなく、構成要素をすべて備えているという意味である。アリストテレスはこう説明する。

換言すれば、叙事詩の物語を構成することは、歴史を書くのとは違った種類の仕事でなければならぬ、と言うことである。歴史においては、説明の対象となる事柄に関して必然的に要求されるのは、行為の統一性ではなくして、時間の統一性である。そこでは、同じ時間の範囲内に起こった出来事である限り、一人の人間の身の上のことにせよ、多数の人間のことにせよ、すべて無差別に記述され、それらの出来事の一つ一つの間には偶然的な関係しか存在しない。(1459 a 21-24)<sup>21)</sup>

つまり、歴史ないし年代記の報告する複数の事件は収斂もしなければ、それらが相俟って一定の結果を生み出すこともない。単一性も因果性も無いというわけである。

こうして哲学者は多くの詩人たちを批判する。次の文章などは、まるでロティの作品の特徴を批判的に浮き彫りにするために書かれていたかのようである。ホメロスと違って、

他の作家たちは、とアリストテレス。一人の人間について、ひとつの期間について、あるいはひとつの行為ではあるが、多くの部分に切りはなしうるような行為について、詩を作っている。(1459 a 37-1459 b 1 ; 藤沢訳、p. 341)

極端な例を挙げよう。『ロティの結婚』の著者は、第Ⅲ部のその名も「中国人に関する余談」—文字通りには「中華の前菜(hors-d'œuvre)」—なる章を、次の断り書きからはじめているのである。「一つの突飛な思い出。それは先立つ事と何ら共通点もなく、今から続くものとはなおさらである。それはこの物語とは単なる時間的な関連、日付上の関係しかない」(Ⅲ, iii, 217)。まるで

『詩学』の教えに意識的に背くために書かれたかのごとき文章である。更にこれにつづく章も、「… カリフォルニア、クァードラソしてヴァンクーヴァー、ロシア人のアメリカ… この物語にはまったくつながらぬ6ヶ月の遠征と冒険」(Ⅲ, iv, 218) という文章ではじまっている。

率直に脱線とか余談とか付録とか呼ばれて然るべき類のテキストも作品の構成に参与するのである。要するに、ロティの「小説」はその非劇性においてまさに『詩学』の対蹠点に位置するといえることができる。

### 形式および話題の整理

雑多さはしかし主題のみにかかわる特徴ではない。テキストを構成する文章の形式ないしタイプについても考えなければならない。著者のほかの作品の場合も同様だが、まずテキストは「章」とよぶには短いけれどもそうよばざるを得ない単位、すなわち一ないし複数の段落をもつ相対的に不連続の文章群で構成されている。数行しか含まない一段落からなる「章」もある。テキストの構成は、次のように整理することができる。

部	「章」の数	頁数
I	51	38
II	47	44
III	35	27
IV	12	12

章の数も文章の量も終りにむけて少なくなっていく事実とともに、頁数よりも章の数のほうが多いことが分かる。テキストが断章の寄せ集めだからである。

ところでそれらの章にはローマ数字で通し番号が打たれている。そしてそこには、話題を指示ないし暗示する見出しがかなり頻繁に付されている。例えば「紹介」(I, xi)、「王宮の事柄」(I, xvi)、「ヴァエケヒュ女王」(II, iii)、「なお平穏な日々」(II, ix) などである。たまには文章の種類—手紙であるとか日記であるとか—を指定することもある。物理的に連続する複数の章が、一貫した話題を続けることもある(例:「雲」, I, xxiv-xxix)が、そうでないことの方が多し。このように断章を次々に追加してゆく書き方は、フランスの作文法で厳しく要求される移行の手続き (transition) を無視し、その拘束を一挙に逃れうるといふ便宜を与える。

主題に関して雑多であるだけではない。文章のタイプについても、したがってまた語りにおいて用いられる時制についても、作品はそれぞれ性質の異なる雑多なもの寄せ集めである。以下列挙すれば、

- ① プラムケットによるロティの紹介文 (I, i, 135-136)<sup>22)</sup>。
- ② 物語の基調となる単純過去の説話。
- ③ 手紙。それにもロティが故国イギリスに住む姉にあてた手紙 (I, iv. 現在形および複合過去形; I, xxii)、同じくロティがレンディア号に残って宿泊しているジョン・Bにあてた手紙 (I, xlii)、またタヒティを離れて巡航しているロティにあてたララヒユのそれ (II, ii; III, ii. 後者は説話中での引用; IV, iii; IV, v) がある。
- ④ 明示的に「ロティの日記」という見出しをもつ章もある (I, xxxii, 157-158. 半過去時制による回想文; IV, vi, 248)
- ⑤ まれには更に時間的な距離をとった回顧の文。そこには書く行為の現在も介入する。これは日記というよりルソーにも例をみる自伝の方法である。
- ⑥ 論文ないしエッセイは少ない。「政経と哲学」なる断章 (I, xxiii, 152) はその例。この種のテキストが支配的になるのが『ペルシア人の手紙』であった。
- ⑦ 論文のごとき標題をもちながら、実は短い逸話を収録した章もある。「美食」 (I, xxxvi, 162. これは人肉の味に関するある人物の発言)、「言語道断」 (I, xlvi, 167. 女王の排便の話題) はその例である。

要するに日記ないし紀行文においては、ひとつの時期に次から次に起こることは必ずしも因果関係にあるわけではないし、更にそれらは同一主体に起こることですらない。単一の観点から判定できないという点こそ、筆者が記述している作品の特徴なのである。こうしてあえて複数の観点をとらざるを得ないのだが、上述の各部にはそれでも、ロティーララヒユの関係からにせよ、あるいは異国滞在の観点からにせよ、またタヒティ認識にとってであれ、もちろん筆者の主観的な判断となる危険は覚悟しなければならないが、相対的に重要とみなすことのできる事件がないことはない。これを最後に指摘しておこう。

- 第一部 タヒティへの到着、ポマレ四世に紹介される。ララヒユとの出会い、「結婚」。「雲」の事件。
- 第二部 マルキーズ島滞在、ララヒユとの同棲、徒歩旅行、モーレア島での新教教会堂の奉献祭、兄の昔の愛人に会う。
- 第三部 兄の「遺児」探索、帰国。

#### 第四部 後日談（ララヒユのその後の生活と死を知る）。

##### 時間の拡張

『ロティの結婚』における物語のあり方、いわゆる「あらすじ」の特徴を把握するために、筆者は様々の側面から作品を観察してきた。要約すれば、1) それはまず日記ないし（必ずしも日付はないという意味で）それによく似た文章である。そこではロティ（とララヒユと）の私生活が中心的な話題となる。2) それは旅行記である。タヒティ（加えてマルキーズ島および北アメリカ）滞在中に起こることを記載する紀行文である。日記でありかつ紀行文であるとしても驚くにはあたらない。この二つのタイプが類縁関係にあることは、フランス語の « journal de voyage » や « journal de bord » という表現が示唆している。「旅日記」という表現もあるように、それは日本においても観察される事実である<sup>23)</sup>。3) それはルポルタージュである。作者はタヒティ（加えてマルキーズ島および北アメリカ）の状態を読者に伝えるために、できるだけ多くの事柄を紹介しようとする。首尾一貫した物語の構築とか展開とかへの関心はそれほど強くない。一つの物語を語ることだけが目的ではないのである。こうして多かれ少なかれ付随することはもちろん、付随しない事柄も排除されず、滞在期間中のことなら取るに足りない些事も記載される。形式も一定ではないだけでなく、異なる書き手の文章と同様に宛人の異なる文章（手紙の場合）も収録される。以上の事実を見た。

しかし、これで我々はロティの「小説」の特徴を十分精密に記述したのであろうか。それは例えば、我国で1930年代に運動として始まったという「生活綴り方」、つまり「日常生活のなかで発見したことや感じたことをありのままに書かせて、社会認識を育てることを目的とする作文」<sup>24)</sup> に似ているだろうか。教育にかかわる運動であるか否かという点は別にしても、上に指摘した旅行記とかルポルタージュとかの面はロティに独特であろうし、とりわけこの運動という「ありのまま」という理念はロティには適当しいのではないと思われる。また、ドイツ語において一人称小説を意味するといわれる « Ich Roman » の訳語として「私小説」とよばれながら、元の意味から逸れて「自分を主人公とし、作者自身の生活や体験をありのままに書いて、心境を吐露したわが国の近代文学特有の小説」<sup>25)</sup> を考えるわけにもいくまい。旅行記でもありルポルタージュでもあるという点で異なるし、作者自身の生活や体験がおそらく核になるとはいえ、「ありのまま」という要請はロティには通用しないと思われるので

ある。

そのことを証明するただひとつの単純なしかし見逃すことのできない事実をここで指摘しよう。それは作品の時間性、物語内容にともないこれを分節する時間のあり方である。すなわち、ジュリヤン・ヴィオによるタヒティ滞在の期間と『ロティの結婚』における主人公のそれとは、決して合致しないのである。両者はそれぞれ次ぎのように画定される。

ヴィオの巡航	始め	: 1871年 3月15日
第一のタヒティ滞在	始め	: 1872年 1月29日
	終り	: 3月23日 <sup>26)</sup>
第二のタヒティ滞在	始め	: 1872年 6月26日
	終り	: 7月4日 <sup>27)</sup>
ヴィオの巡航	終り	: 1872年12月4日 (プレストへの帰港)
ロティのタヒティ滞在	始め	: 1872年 1月20日 (I, iv, 137)
	終り	: 1873年12月1日 (III, xii, 223)

最後の1873年12月1日とはロティのタヒティ滞在期間のうちで作品テキストに書きこまれた最後の日付である。出発はもう数日遅れる。

ともあれ、ヴィオの生活体験としてのタヒティ滞在は最初のそれが2ヶ月足らず、それに第二回目の寄港の一週間を加えてもせいぜい9週間に過ぎないのに、作品におけるロティのそれは2年足らずと大幅に引き伸ばされている。ただしこの間にマルキーズ島での滞在—1872年5月の一ヵ月 (II, v, 177)—および新大陸への巡航が介在することを忘れてはならない。後者については、途中経過を画するいくつかの日付は見られる (III, i, 216; ii, 216) けれども、全体としての時間測定はかならずしも容易ではない。タヒティへの帰還には1873年11月26日 (III, vi, 219) なる日付が記載されているものの、出発のそれは明かされていないのである。もっとも帰路の記述の開始部つまり第三部第六章の冒頭におかれた指示、

... 十ヵ月がすぎた。

... レンディア号は11月1日にサン・フランシスコを発ち、全速力で南へ向かう。

(III, vi, 218)

の「十ヵ月」(dix mois)を新大陸への航海をいわばふりかえって整理し纏める記述と見て、そのように筆者は理解するのだが、巡航全体の期間を意味すると解釈するならば、これにタヒティへの帰還に要する時間およびマルキーズ島での一ヵ月を計算に入れて、2年足らずからほぼ1年を減じ、主人公の実際のタヒティ滞在は結局1年足らずになると考えることができるだろう。もう一つ単純だが確実な比較もできる。ヴィオによるフランスを発・着点とする巡航の全期間が1年8ヵ月3週であるのに対して、ロティの場合には単にタヒティ滞在の期間だけですでに1年10ヵ月をこえているのである。こうして、作者が虚構の時間をどれほど引き伸ばしたかが如実にわかる。

このことは必然的に、作家による構成上の工夫を予想させる。つまり事実に対する改変をもっての大幅な「膨らまし」、別要素あるいは細部の追加あるいは偽装された重複<sup>28)</sup>などである。ロティにおける事実の再現と変形の関係は取りあげてよい問題であることが分かる。筆者としては、作品の虚構性に関してこの少なくとも指摘できる一面を確認しておきたい。

同様の、今度は日本にかかわる例をもう一つ挙げる。ヴィオは長くは4ヶ月、短くは18日と、都合5回にわたってわが国に立ち寄っている。再びリストで示すと、

潜在の期間	潜在場所	→ 作品(発表年)	物語の持続
1. 1885.7.8—8.12 (36日)	長崎	『お菊さん』(1887)	7.3—9.18 (78日)
2. 1885.9.19—11.17 (2ヶ月)	瀬戸内海、神戸 横浜 (6日)		
	(この間に日光へ)	『聖なる山日光』(1888.9—10) <sup>29)</sup>	(2日)
3. 1900.12.9—1901.4.1 (4ヶ月足らず)	長崎		
4. 1901.6.28—7.16 (18日)	長崎	『梅夫人の第三の青春』(1905)	
	(中国への巡航)		
5. 1901.8.26—10.30 (2ヶ月余り)	瀬戸内海、長崎、 神戸、横浜、長崎		
	(それぞれ1~3週間の滞在)		

『ロティの結婚』から7年後の作品である『お菊さん』が、同様の引き伸ばしによる制作であることが分かる。36日間のヴィオの潜在の代わりに、あたかも人生を補充する虚構のおかげでロティは78日間を長崎で暮らすのである。

こうして、我々を導いてきたクロード・ギャニエールによるロティの小説についての評価「それらはロティが一生の間毎日書いていた日記 (...) から、そのまま抜き出されたかのように感じられる」(n. 10) について、もう少し精密に次のように答えることができる。ロティの小説は、部分的にはそういうこともあり得るにせよ (cf. n. 28)、全体としては日記から「そのまま抜き出された」(tirés tels quels) ものでは決してないということである。

さて、上のリストにちなんで最後の指摘をしておこう。もっと遅れて1905年に出版される『梅夫人の第三の青春』においては、そのような作為はずっと影をひそめると思われる。ロティ文学の全体的な方法の転換を語るクロード・マルタンの指摘を参照しよう。

『お菊さん』より一年余り遅れて出た『秋の日本さまざま』は、ロティの仕事のなかで転機となる。旅行記の「小説化」(mise en roman)—それがしかし彼に『アジャデ』『ロティの結婚』および『お菊さん』の成功をもたらした—を放棄して、小説ジャンルをすら放棄して(1892年の *Matelot* (『水夫』)でこのジャンルを続けるのみ)、今や彼は、純粋に描写的で抒情的な大きな旅行談を筋立てをつくることなしに、思い切って公衆にゆだねることになる。数ヵ月後には『モロッコにて』がでるし、その後聖地三部作が現れるだろう<sup>30)</sup>。

筆者は、『ロティの結婚』における物語構成の緩やかさを指摘するとともに、それでも作品がどのようなものかについて大枠を示すことにつとめた。今やいささかなりともテキストをして語らせるときであろう。以下、作品の連辞秩序を考慮せず、恣意的な選択による断片的な紹介になるが、特に主題と文体に関して注目すべきと思われるいくつかの件の注解を試みたい。

### Ⅲ. 『ロティの結婚』を読む

テキストに関するこれまでのアプローチから、ロティの文章は何か無味乾燥な雑な散文であるだろうとの予断を与えなかったであろうか。もしそうなら、これは是正しなければならない。実際には筆者は彼の文体については何も述べていないのである。

#### 1. 1. 兄、そしてまず悲哀

ロティにおけるその兄の追想にかかわる文章から見よう。ハリー・グラント



は彼の発する最初の言葉—1872年1月20日付の姉（もしくは妹）あての手紙—の書き出しで自分の兄のことを思い出している。

愛する姉さん、

いま僕は、兄さんがふかく愛していたあの遠い島を前にしている。この神秘的な地点は、僕の少年時代の夢の場所でした。そこに行きたいという異様なまでの欲求のために、僕は少なからず船乗りの仕事へと駆り立てられたのです。けれども僕はもうこの稼業に疲れ、飽きています。（『ロティの結婚』, I, iv, 137）

タヒティへの思いは兄の思い出に繋がっている。つまりエグゾティズムの流行に拍車をかけたロティ（我々はグラントについて語りながら、ヴィオについても語っている）の旅と文章は、ただ遠くへ行きたい、知らないものを見たい、知らない人に出会いたいという漠然とした憧れなどではなく、「そこにはすべては秩序、美、豪華、静けさ、そして悦楽に他ならず」<sup>30</sup>、とボードレールが歌ったような未知の喜びへの願望などではなく、その数年後に不幸な死をとげることになる兄が、かつて数年間の幸せな恋を生きた土地、そこから幼いヴィオに語りかけることもあった遠い土地への憧れに発したものだ。あるいは全てが「*déjà vu*」（既視）（I, xxii, 151）の感覚であったかもしれない。ところが、反面、ロティは船乗りの仕事にもはや喜びを感じていない、と言う。

そのことは続く段落で明確な表現を受ける。「年月がたって、僕は大人になった。すでに世界を経めぐって、いまやついに夢にみた島を前にしている。けれども、そこに僕が見出すのは哀しみと苦い失望だけなのです」。冒頭から哀しみ（*tristesse*）である。と言ってもそれはぶっ倒れて大泣きに泣くといった激しい苦痛をとまなうものではなく、いわば穏やかな、染みいる、あるいは逆にこちらがその中に溶けこんでいくような悲哀である。もしくはこれを補うもう一つの重要な語—これにクロード・ギャニエールは注目した—が表すように、「苦い失望」（*amer désenchantement*）、つまり魅惑や悦楽や魔法からさめた幻滅、失望である<sup>32</sup>。

## 1. 2. ふたたび悲哀、そしてエグゾティズム

もっともロティの哀しみ、幻滅や失望は、亡き兄の思い出と無関係でないことは確かであるにせよ、それのみに由来する魂の状態であるとは断定できない。彼はすぐ続いてエグゾティズムへのある種の軽蔑とヨーロッパ文明の侵入を非難していて、これが幻滅のもうひとつの事由だからである。すなわち、

それから、僕をとりまく人々が僕のタヒティを台無しにしまった。それを彼らのやり方で僕に示すことによってです。どこにでもその凡庸な人格や俗っぽい観念を引きずって行き、あらゆる詩情に冷笑や毒舌、自分自身の無感覚さや愚鈍さを浴びせかける人々です。またそこには文明が来すぎてしまった。僕らの愚かな植民文明、僕らのあらゆる約束事、僕らのあらゆる習慣、僕らのあらゆる悪徳が。こうして野生の詩は仕来りや過去からの伝統とともに消え去ってゆきます。(I, iv, 137)

詩を感じるこのできない人々と彼らの伝える異国、低俗ないわゆる手垢のついたイメージに対する激しい非難である。純粋なエグゾティスムは、異国についてすでに与えられているものに甘んずることなく、未知で未踏の、常にもっと本来的な詩情を求め続ける。それゆえロティは俗っぽい同胞のタヒティ到来を、そして彼らのばらまくありきたりのイメージを非難するのである。

しかしどうなのか。たとえ無感覚で愚鈍な連中が他にいなかったとしても、たとえ詩的な感受性に恵まれた私が一人で未知の世界にいたとしても、他ならぬ私自身の経験が、反復や慣れが驚異を薄れさせないだろうか。当初の鮮烈な感覚は次第に鈍くなり、ついには当たり前のことになってしまうのではないか。実際、それはロティの自覚するところであった。「旅が習慣となれば精神はねむりこむ、と彼は書く。人はすべてに馴染んでしまう。一最も風変わりなエグゾティックな景観にも、最も異常な面貌にも」(III, xvi, 226)<sup>33)</sup>。もちろん、この当然の事態にひるむロティではない。時たま鮮烈な発見があるからである。

時にはしかし、と異国情緒の探求者はつづける。精神は目覚め、ふたたび自己自身を見出す。自分をとりまくものの異様に突如として打たれるのである。(Ibid.)

しかし、特権的な瞬間におとずれるこの開示は、その感動は凝視の反復に耐えうるであろうか。究極的には、処女性を探索するあの「初代の」ドン・フアンの放浪にも似て、行為の目的は実行そのものによって失われる。人跡未踏の地にはいる者は、闖入のその瞬間にもはや人跡未踏の地にはいない。

対象の側の問題もあろう。というのも「凡庸な人格や俗っぽい観念」をまぬがれているとしても、彼自身がそのいわゆる「愚かな植民文明」をもち込まないという保証はあるのだろうか。彼はそれを無邪気に(?)信じているようである。我々も仮にロティが「愚か」ではない文明を伝えると想定しようか。というのも現地人たちと何らかのかかわりをもつ限りにおいて、異国人が全く何

ももたらさないということは困難であろうから。そうすれば彼は未開社会のいわば「救世主」となるであろうか。場合によってはおそらく。しかしその場合でも、彼は現地の仕来りや伝統を、少なくとも相対化し、風化させずにはおかないであろう。それはロティの望むところなのか。

さて、悲哀は兄の思い出に限定されない。彼はじっさい始終、いたるところであらゆるものについて、例えばララヒュについてはもちろん、土地の音楽やさらには風景にすら同じような感情を抱くのである。それゆえ読者はこの語もしくは類義語にほとんど二三頁ごとに出会う。ところで、意識的に書く作家、自分のペンの下にしばしば現れる語を自覚せずにはいない作家が、一というのも彼は『モロッコにて』の中でこう書いているのである。

(僕はじっさい « vieux » (古い) という語をこんなにしばしば用いていることを残念に思う。同じように日本について記述していたとき、« petit » (小さい) という語が、自分の意に反して行ごとに出てきていたことを思い出す...)<sup>30</sup>

一この自己の仕事ぶりを知っている作家が、奇妙なことに « tristesse » や « mélancolie » のような語は、実はタヒティでのみならず、インドでも日本でも、モロッコでも、ロシュフォールに帰ってさえ、まるで意識していないかのように繰り返し用いてしまうのである。「小さい」や「古い」は客体を記述する語であるのに対して、「哀しみ」や「憂鬱」は本来的に書き手の心の状態そのものだからであろうか。じっさい、それはピエール・エマニュエルの詩集の標題を転用すれば、ロティの魂のいわば「故郷」<sup>35)</sup>のごときものなのである。悲しい風景の描写をひとつ読もう。

## 2. 1. 風景の悲哀

タヒティの魅力のうちには、オセアニアのあらゆる島々に垂れこめているあの奇妙な悲哀が少なからずはいつている。果てしない太平洋のなかでの孤立、海風、岩礁にしぶく波の音、深い闇、白い華奢で驚くほど丈の高いココ椰子の幹のあいだをぬって歌いながらゆくマオリ人たちのしゃがれた悲しい声 (...)

それにしても人々には夜、聞こえただろうか。ポリネシアのあの真っ白い珊瑚の砂浜で。人々には聞こえただろうか。夜、林の奥から葦笛が聞こえてくるのを。あるいは遠くからひびいてくる法螺貝<sup>30)</sup>のうなりを。(I, xxxv, 161)

いささか単調の誇りをまぬがれ得ないほど、ロティはこの種の語を多用するこ

とが分かる。他方、ここでは異国趣味の表現において常套的な一連のめずらしい語彙の存在に読者は気づく。それはまれな音響の組み合わせとともに見慣れぬイメージを喚起する。そしてそれが構文の反復によって抒情性を実現する詩的な散文のうちに散りばめられているのである。

## 2. 2. 自然と文化

ロティが描写にひいでた作家であるという点については、分野は異なるが、それでも伝統的に優れて「描写」をこととする芸術の一ジャンルであった絵画の側からの証言がある。ゴッホの言葉である。画家は1888年の妹あての手紙において次のように書いている。

何かピエール・ロティの本『ロティの結婚』で描かれている (dépeint) ようなもの—そこにはオタヒティの自然界が描写されている (décrite) —を、今日の画家が作ってみるといったことは、僕には十分に想像できる。これは君につよく勧める本だ<sup>37</sup>。

一連の「描く」を意味する語 (上の2語にももちろん « peindre » を加えよう) が示唆する文章と美術との記号体系間関係から始めて、より具体的に、1880年代におけるロティの画家たちへのインパクト、ロティーゴッホの風景描写の関係づけの可能性、ゴッホのこの思いつきのその友ゴーギャン—『ノア・ノア』の作者でもある—のまさにポリネシアにおける実践という仮説... とさまざまなことを夢想させる指摘である。今はただ一つ、ロティの自然描写がゴッホに多大の印象をあたえたという平凡だが確かな事実を確認するにとどめる。

そして、『ロティの結婚』における風景描写のあり方を観察するために、もう一つの例を取り上げる。

細長い椰子の木の見おろすタヒティの白い砂浜をたどっていると、ところどころで—青い広大な海にのぞむ人氣ない岬とか、過ぎし世代の人々によってメランコリックな趣向で選ばれた場所で一甲いの小山、大きな珊瑚の塚にであう... これはマラエ、かつての首長たちの墓である。そしてそこに眠る死者たちの物語は、ポリネシア群島の発見にさきだつ神話的で知られていない過去のうちに消えてゆく。—マラエは、マオリ人たちの住みついたあらゆる島の浜辺で見られる。ラパ=ヌイの謎めいた島民たちはこれらの墳墓を醜悪な仮面をつけた巨大な像でかざっていた。だがタヒティ人たちは単にそこに鉄の木の木立を植えるだけであった。ここでは鉄の木が糸杉にあたるのである。その葉叢はうら寂しい。海風はその堅い枝を吹きすぎるとき独特のシューシューという音をひびかせる... これらの年月を経てなおも珊瑚の白さをたもつ、黒い大きな木々をいただく墳墓は古の恐ろしい宗教の思い出を呼びおこ

す。それはまた人身御供が死者の記念にささげられる祭壇でもあった。

—タヒティは、とポマレは語った。どんな古い時代にも生贄が供儀の後で食べられなかった唯一の島なのです。ただ骸<sup>むくろ</sup>を食するふりをしていただけです。数個の目玉を眼窩から取りとっていっしょに皿にもり、それが女王に供せられていたのです。—主権者のおぞましい特権。(ポマレの言葉より)。(I, xlvi, 169)

いくつかの特徴をあげれば、

1) 著者はリポーターとして、そこにはおそらく読者にたいするインパクトの利用という宣伝の意図もあろうが、情報源の一つを明らかにしている。これは一種の報告の文章でもある。

2) 風景と文化との結合。2. 1 の件でも住民の歌声や楽器が風景の一部をなしていたように、ここでも記述は単に「純粋な」自然描写ではない。自然と人の営みとは互いに排除しあうのではなく、結びついているからである。優れて文化を表象するマラエはまた自然界の一部なのである。

3) ここには兄の思い出はまず無関係なのだが、それでも悲哀を認めることはできる。マラエの造作に見る「メランコリックな」趣向、そして「うら寂しい ≪ triste ≫」葉叢である。

4) 2. 1 では聴覚にかかわる記載もかなり重要であったのに対して、この段落の描写においては明らかに視覚が優位に立つ。視覚と聴覚とに帰属する語彙を区分してみる。

視覚：minces (細長い)、blanches (白い)、regardant (を眺める、を向いた)、l'immensité bleue (広大な青さ)、de loin en loin (ところどころで)、grands (大きな)、gigantesques (巨大な)、horribles (醜悪な)、blancs (白い)、blancheur (白さ)、surmontés de grands arbres noirs (大きな黒い木をいただく)。

聴覚：sifflements particuliers (独特のシューシューいう音)

5) いくらでも見られるエグゾティスムの語彙は、列挙する必要はあるまい。

### 3. 1. ララヒュあるいは文明の深淵

問題の娘ララヒュについての件は見ておかねばなるまい。プラムケットはまことしやかに、ララヒュが1858年1月にボラ・ボラ島に生まれたという<sup>38)</sup>。(ロティのタヒティ到着は1872年だから、彼らが知り合ったとき彼女は14歳であった)。タヒティに連れてこられて、少女は「マオリ族の古くからの習慣」(I, iii, 136)にしたがって、遠い親戚の女性の家に引き取られていた。ポマレ四世から「結婚」が示唆されたとき、彼女の育ての親たちはどう考えたのか。

14歳の娘はもう子供ではない、男の子といっしょに生活してもおかしくない、「少なくともパペエテに行って売春などして欲しくない」、—こういう発言がなされるためには、それがありがちなことだという前提がなければならない。島の社会・経済状況そして風俗がどういふものだったかある程度推測できる—さらに、若いロティのほうが他の男たちよりは望ましい、というのも彼は「優しいようだし、彼女を愛していると思われる」というわけで、年寄りたちは二人の「結婚」を了承した、と語り手は言う (I, xv, 145)。

ところで、交際ないし同棲をはじめてしばらくたって、ロティは次の文章を書いている。

ララヒュはすでに何かを感じはじめていた。後に悲痛な思いで感じることになる何か—自分の心のうちで明確に表明することのできない何か—そしてとりわけ自分の原始的な言語の単語をもちいて表現することのできない何かを。—彼女はロティと自分との間には知的な領域においていくつもの深い淵があるにちがいないと漠然と理解しつつあった。未知の観念と知識のいくつもの世界があるにちがいないと。—彼女はすでに僕たちの人種にも、考え方にも、どんなに小さな感情にすら根本的な違いのあることを把握しつつあった。人生のもっとも基本的な事柄についての観念が僕たち二人のあいだでは違っていた。—タヒティ風の服をきて彼女の言語をはなすロティは、彼女にとっては依然として「パウパ」、すなわちいくつもの大海をこえて夢幻の国々からやってきた人のひとりだった。動きのないポリネシアに、数年来かくも多くの未曾有の変化、かくも多くの思いがけない新奇なものをもたらしている人々のひとりだった。(I, xxxviii, 163)

まず全てはララヒュについてのロティの解釈であるという点を確認しなければならない。そしてその限りで指摘できるのは、まずララヒュが生きている感覚とロティのものである知性とのあいだに断絶があるというロティの解釈である。知性によって理解できない (なぜならそれは無い、もしくは発達していない)、少なくとも表現できない (なぜならその言語は原始的である) ことを、ララヒュは感覚ないし直感によって感じ始めているという。それはどんな男女の間にも、どんな間柄の二人にもあり得る差異ではない。それはポリネシアと西洋との根本的な差異に由来する断絶に他ならない。換言すれば、西欧とタヒティとの比較が、二人の登場人物の対比のうちに象徴的な入れ子構造を実現しているのである。これは人種・知性・文化といった全体的な対比であるが、その模範的なパラディグムは、言語、現地の « primitive » (原始的) といわれる言語とヨーロッパのいわゆる「文化」言語とを分かち隔てる断絶である。

ところで、西川長夫氏はいわゆる「フランス的明晰」を検討した論文の中で、

リヴァロルの思想を分析しつつ、彼の「言語論の根底には「理性」と「情念」の二分法がある」と指摘している。すなわち、

リヴァロルの念頭には、①情念—感覚—倒置—詩・音楽—社会的孤立と混乱、②理性—論理—直接語順—散文・会話—社会的結合と秩序、という二つの系列が存在している。そしてこの二つの系列は文化の二つのタイプであると同時に、文明の二つの段階を示す。「明晰性」はこの後者のより高い文明の指標である<sup>39)</sup>。

もちろんそれぞれの主題も文脈も異なる二つの件が全く同じ字句の対比を出現させるはずはない。それでもロティの文章からは、リヴァロルにおける上記二つの系列に呼応せずにはおかない次の二分法を析出することができる。すなわち、

1 国	2 人物	3 言語	4 認識
A : immobile Polynésie (動きのないポリネシア)	— ララヒユ —	langue primitive (原始的な言語)	— sentir ; incapable de formuler, d'exprimer avec des mots (感じる。 (明確に表明できない、 語で表現できない)
B : pays fantastiques (夢幻の国々)	— ロティ —	×	comprendre qu'il devait y avoir des abîmes..., savoir la différence de nos races... (深淵...が あることを理解する、 人種...の違いを把握 する)

若干の記号論的な操作を試みるまえに確認すべきことがある。この件は無人称的な言表でもなく純粹にロティのそれでもなく、ララヒユの心理をその民の「原始的な言語」をまねて記述するロティの言葉である。そのため、B-1には政治上ないし地理学上の名称、ロティにとっての常識的な固有名詞である「ヨーロッパ諸国」とか「イギリス」とかは現れない。またB-4はララヒユにおいて開始されつつある知性の作用を記述しているのだが、それは、基本的にロティ(やその同胞)にとっての常識的な知識に他ならず、それに彼女も与りつつあ

るといのであるから、Bの系列に配分することが適当である。その上で両系列の間の対立に鑑みて、A系列の概念に対立する概念をBに代補することができるだろう。じっさい、B-3の空白には、A-3との対比でヨーロッパ諸言語つまり « langue(s) civilisée(s), évoluée(s) » (文明化し、進化した言語) を、B-4には同様に « capable... » (明確に表明できる、言葉で表現できる) を追加することができる。さらには西川氏のリストに用語を借りて、A-4には「感情・感覚」を (« sentir » もそれを促す)、それとの対比でB-4には「理性・論理」を措定することも不可能ではない。

ところでこれは、18世紀以来のフランスにおける西欧中心主義の常套的な思想であって、大同小異、ヴォルテールやモンテスキウをはじめとして、ルソーやディドロにおいても見出される。今はタヒティに関するディドロのテキストについてだけ証拠をあげておこう。

ブーガンヴィルの船でフランスにきたタヒティ人アオトゥルーについて、ディドロの登場人物であるBは、その若者は国に帰っても、フランスについて大したことは同国人に伝えることはできまいと推断し、その理由をこう説明している。「なぜかといえば、彼にはわずかしかわからなかったからですし、彼がいくらかの観念を得た事柄に対応するいかなる用語も自分の言語のうちに見出せないだろうからです」<sup>40</sup>。これまた西欧人との差異においてタヒティ人の文化や精神を特徴づけるテキストであり、タヒティ人は観念の量においてもしくは要するに知性において劣るのであって、少なくともその言語に西欧のことをよく表現しうる語彙はないと断ずる点においてロティに通じることは明らかである。編集者のプーレスト教授はそこに注記して、この見方はすでにデュッフォンに、そしてブーガンヴィルやペレールにも見られる « préjugé » (予断、偏見) であるとして、それぞれからの文章を引用している<sup>41</sup>。こうして我々は、ロティについて「これは啓蒙の子である」と言うことができる。

最初に述べたように、これら全てはロティの認識ないし印象、つまりは作家の文明観であり、思想である (cf. II, xxxi, 202)。ところでこの件で自己自身を語るロティの語り方には奇妙なものがあると筆者には感じられる。それは、彼自身の存在、彼との同棲の結果ララヒュは進歩=退廃しつつある。(1. 2) で見たように、西欧化という意味での進歩は、ロティも確信しているらしいルソーの逆説に従って同時に墮落の道である。にもかかわらず、そしてそれを本人も知らないわけではないのに、彼はいかなる困惑も覚えていないことである。またララヒュにおける「認識」の変化・発展に気づいてこれを語るロティは、自



分のその認識そのものについて、誤解や間違った思い込みの可能性はもちろん、変化や進歩すら全く認めていない。そもそも「タヒティ風の服を着て、彼女の言語を話す」というロティは、一体どれほどそれを話せるというのか。数ヶ月の滞在者に過ぎない彼はどれほどタヒティ人の感情にせよ考え方にせよわかるというのだろう。生活の実践がもたらさずにはおかないところの発展も躊躇いも後退もまったくない知性、すでにあった知性がすでに作られていた観念、西歐からもちこんだ考え方、すなわち予断であり偏見を絶好の機会とばかり再認し表現しているのではないか。

上のテキストに続く部分は、ロティ / ララヒュの「結婚」の行く末を预言する件として知っておいてよい。「彼女はまた知っていた。ロティはほどなく遠い故国に帰っていき、ふたたびもどっては来ないだろうということ。彼女には気の遠くなるような距離のことは全く分からなかった」(同上)。

### 3. 2. 「結婚」の危機

ララヒュとロティとのいわゆる「タヒティ風の結婚」には、ただ一度、危機と呼べる事件が発生する。決して快とはいえない話題であるけれども、少なくとも物語の軸をなす二人の感情生活にかかわることではある。第一巻の第24章は「*Un nuage*」(雲)と題されていて、そこから第30章まで数ページ(pp. 153-157)にわたって、一つの逸話が続く。

ある日のこと、いつものようにアピレ (Apiré) の小川のほとりで遊んでいるとき、

僕たちはふと、裾をひく浅緑の薄布の上着をまどって、長い黒髪はていねいに編み、顔にはジャスミンの冠をいただく人が進んでくるのを見た。

薄い上着をとおして、かつていかなる束縛も受けたことのない少女の清らかな胸がほのかに透けて見えた... 彼女はまた腰には豪華なパレオを巻きつけていて、その赤地に大きな白い花の模様が軽やかな薄布のしたに透けて見えていた。(I, xxiv, 153)

この色彩あふれる描写につづいて、「僕はかつてそれほど美しいララヒュを見たことはない」とロティは書いている。そこで遊んでいた人々も感嘆の声を上げる。しかしロティの傍らにすわった彼女は、なぜか「悪いことをした子供のように目を伏せている」。その上、仲間たちは何か笑いをこらえている様子。そのひとりで「利口で手厳しい」テトゥアラという女が、そのドレスのことを「中国製の布でできているのよ」と大声で言う。するとみんな噴き出す。ララ

ヒュはほとんど泣き出しそうな様子を示す。

ロティの心には疑惑の黒雲がわきおこる。その衣装は彼がプレゼントしたわけでもなく、なかば裸で生活している彼女の養親についても論外だった。じつはパペエテには中国人商人たちが住んでいて、タヒティの女性たちはこれを嫌っている。しかし彼らは「抜け目がなくかつ金持ち」であり、なかには金品の贈り物を持ちいて「内密に特別のはからい」を手に入れる者もいるというのであった (xxv, 154)。読者は、結婚に際して二人の間には他の白人の男および原住民の男の場合の対応は予想されていたが、(ロティの側における他の女性との可能的な関係の問題とともに) 中国人のことは考慮されていなかったことに思い至る。

その後ロティは、彼らの水浴び場で一人の年配の中国人が身体を洗っているのをみかける。語り手はその醜い姿、とりわけ黄色い肌を強調する。そこにララヒュとその幼馴染で親友のティアファイがやってくる。中国人はあわてて衣服を身につける。三人は親しげな挨拶をかわす (xxvii, 155)。男はポケットから白粉とか化粧用品、中国菓子などを取りだして二人にあたえる。男はことにララヒュの方に関心があるらしく、バラ色の大きなリボンを彼女にわたす。「その代わりにララヒュはむき出しの肩を男にキスされるがままになった」。次に中国人は「その唇を僕の恋人 (ma petite amie) の唇に近づけた」 (xxviii, 156)。そこで少女たちは「羚羊のように」逃げる。その続きに注目しよう。

...翌日のこと、ララヒュは僕の膝に頭をもたせかけて熱い涙を流していた...

森の中で成り行きまかせに成長するあわれな小娘の心には、善と悪の観念は不完全なままであった。そこには大きな樹木の陰でひとりだけでやってくる歪で不完全な無数の観念が見出された。— しかし瑞々しい純粹な感情がそこを支配していた。老いた両親のつかっている聖書のうちにたまたま汲みとったいくらかのキリスト教的なものも混じっていたが...

お洒落で甘い物がすぎなせいで、彼女は正しい道からそれたのだった。しかし僕は確信していた。それらの珍しいプレゼントと引き換えに彼女は何もあたえはしなかったと絶対に確信していた。そしてこの不幸 (le mal, =悪) はまだ涙によって償うことができると。

彼女には、自分のしたことはひどく悪い (fort mal) ことだと分かっていた。ことに僕に苦痛をあたえたということが分かっていて。(…)

彼女は全てを白状したのだった。緑の薄布のドレスのことも、赤いパレオのことも。可哀そうな娘よ、彼女は、嗚咽のために苦しい息をつきながら心から泣いていた。そしてティアファイもまた、友が泣くを見て自分も涙を流すのだった...

これらの、ララヒュがその人生でながした最初の涙は、僕たちの間に涙がしばしばもたらす効果を生みだし、僕たちをもっと愛し合うようになった。— 彼女に対して僕の抱いていた感情のうちで、心がもっと大きな部分を占めるようになった。そしてアライテアの姿はし

ばらく消えた。

オセアニアの<sup>ひとけ</sup>人気のない森のなかで、僕の膝の上で涙をながす奇妙な小娘は、これまでとはまた違った様子で見えた。彼女ははじめて僕に誰か (quelqu'un) として見えた。(I, xxix, 156. 強調点筆者)

そしてじっさい、この日以来ララヒュは「自分をもはや子供であるとは考えず、裸の胸を白日のもとに見せるのを止めた」(I, xxx, 157) という。

ここは道徳の研究の場ではない。筆者は簡単に二つ三つの点を指摘するにとどめたい。まず一つは、ララヒュにおける道徳にかかわる観念、つまり善悪のそれと感情とのちぐはぐな成長という、3. 1 で見たのと類似のテーマの反復が見られることである。そして彼女はこの事件をきっかけに、(先の図式を用いれば) さらに一步AからBへと接近したのである。

ところでロティは、善悪に関して自分はよくわかっていると確信しているような書き方をしている。そして特に強調点を打った部分で明らかなように、彼女が悪いことをしたと思っている。ララヒュ自身も自分がひどく悪いことをしたと信じている。だが一体、彼女の行為の何が問題なのであろうか。いくつかの要因が混じり合っているかと思われる。ひとつにはララヒュが他の男に少なくとも心を許したというロティに対する不実があろう。だがロティ自身はアリエテアなる高貴の女性 (I, i, 135 ; xiii, 143...) を少なくとも想ってきたのであるから、ここに「対等の」愛の倫理は語れない。さらに、彼は彼女が現地人と関係をもつのは黙認するというのであった。性関係をもってすらいらないのに—そのことに関するロティの関心には絶大なものがある—、少女がこれほどまで後悔にひたるのは何故なのか。それは、現地で軽蔑の対象になっている中国人—同じ感情をロティも分けもつ (cf. III, xviii, 228) —が相手だからなのだろう。それが恋人を苦しめたということを少女は知っている。下賤の男が、ブルジョワ意識にとって面目丸つぶれのコキュ (寝取られ男) —フランス19世紀における通俗喜劇の格好のテーマ—の汚名をロティに着させたかも知れないからである。最後にもちろん、ここにはそういう男を相手として起こったかもしれない売春の問題もある。

しかしどうなのか。一度の、それも未遂に終わったらしい売春行為と何ヶ月にもおよぶ婚外の際際は、一体どちらがどうだというのだろう。ロティにおいて一方は醜く悪いことであるのに、他方はまったく何のやましいところもないというのは奇妙ではないだろうか。少なくとも彼らの「結婚」はある意味で売春に似たものに他ならず、しかもそれはロティが去った後でとり返しをつか

ない不幸をララヒュにもたらすと想像することができる。彼女にはその生活の手段としてまず西洋人との同棲—兄ジョルジュの「妻」であったタイマハの境遇はその典型的な例（Ⅲ, xix, 230）—しか、そしてその後には売春しか残らないのではないだろうか。実際、それはロティの危惧でもあった。彼は書く。

僕にはよく分かっていた。僕が発ったあと、彼女はパペエテで最も無分別（folles）で最も逸脱した（perdues）少女の一人となるだろうと。（Ⅲ, xxvi, 234. cf. Ⅲ, xxxiv, 241）

第二の属詞は最上級をまとっていわば偽装による婉曲表現になっているが、その暗示的な意味に疑う余地はない。そして事実はどうやらそのように進展する（Ⅳ, vii-x）。要するに筆者には、もしこの事件に悪とよぶべきものがあるとなれば、それはララヒュの行為によりはむしろ彼女が最後に見せる「反省」のほうに、とりわけそれを正しいとしているロティにおける人種差別のほうにではないかと問いたくなるのである。

最後に逸話の神話的な側面を指摘しなければならない。というのも、これはユダヤ—キリスト教の語る人類最初の「罪」の物語をある程度敷き写しにした物語であり、その限りにおいて以上指摘したいいくつかの特徴にさらに別の光をあてると考えられるからである。つまりララヒュはもう一人のエヴァなのである。罪を犯し、そして善悪というものを知り、裸体を恥じるにいたる。これは先に指摘した彼女における道徳的意識の獲得（A→Bへの進歩）の神話的ヴァージョンである。場面を構成するその他の要因についてはどうか。ずる賢い中国人はおそらく蛇に対応する。これは原初の最大の孤立した誘惑者であり、醜い異者である。彼は無知な少女をそそのかしてロティに対して背かせる。

困難はこのロティの機能であろう。彼のモデルは、まず当然問うてみたくなるのだが果たして人祖なのか。しかし、彼は女からの誘いを受けないことはない。したがって共犯者でも運命を共にする「男」（アダム）でもない。それどころか、彼女の陥る墮罪の現場を、介入することなく離れて見ている眼差し、全てを知っている意識である。そして彼こそが背かれて怒る者に他ならない。エデンにはこれら全ての機能を果たすもう一人別の人物がいたことを忘れてはならない。一見とっぴな逆説であるが、主人公にはむしろエホヴァ神を見るべきなのである。じっさいこの人物は神、それもどちらかといえば「嫉妬する神」と呼ぶことができる。（さらに彼は告白を聴き、神にかわって許しを与える司祭の機能も兼ねている）。失楽園の挿話におけるロティのこの位置づけは、先に指摘し

た彼における自らをよしとして疑わない無邪気さ、あるいは後ろめたさの欠如、要するに彼の独善を説明すると筆者には思われる。またそれは次のような文章に、思いがけない強力な意味作用を読み取ることを促すのではないだろうか。

彼女は依然として僕を愛していた。まるで辛うじてとらえ理解することのできる超自然の存在者 (un être surnaturel) を愛するかのよう。 (II, xxxiv, 204)

#### 4. 1. 旅からの旅

次に取りあげるのは、タヒティ島の内部でロティがララヒュと二人でおこなった徒歩旅行に関する報告の一部である。そこにはある種の「原始主義」とでも呼ぶに相応しい文明観—それはたとえようもない晴れやかな充実や幸せの感覚をもって描写される—とともに、またもやあの滅びを予感する哀しみをにじませる機会となる。

ララヒュが養親のもとを離れてパペエテでロティと同棲することになる一方、ティアファイの方も、結婚して (II, v, 177) パペウリリという場所に移っていた。まず出発の件—

… 僕らは一緒にティアファイを、彼女の住んでいる遠い地区に訪ねていく予定になっていた。そしてララヒュはずっと前からこの旅行をととても楽しみにしていた。

ある晴れた朝、僕ら二人は徒歩で、肩にはタヒティ人の軽い荷物、僕は白いシャツを一枚、ララヒュは二枚のパレオに一枚のバラ色のモスリンのタバ<sup>40)</sup>をかついで、ファアアへの道を出発した。

この幸せな国では、黄金時代に旅をしたかのように旅をするのである。もともと太古の時代に旅というのが発明されていたとしての話だが。

武器も食料も金ももっていく必要はまったくない。どこに行ってもただで懇ろにもてなしてくれる。そして島中さがしても、数人のヨーロッパ人植民者を別にすれば危険な動物はいない。それに彼らはごく少数だし、ほぼパペエテの町にだけである。 (II, x, 183)

パペエテからまず南西にファアア (Faaa) に向かい、次いで南下し、そして東へと向かう海岸線に沿う道への出発である。ところで、先に見たヨーロッパ文明の侵入というテーマは、決して何か抽象的な事柄ではないことが分かる。それはここでは「危険な動物」といわれる入植者の存在の形で現れているのである。そしてロティがそういった連中、つまり他国を領有するためにそこで生活している人々を嫌悪していることも分かる。だが彼自身は植民地駐留軍の士官候補生なのである。もちろんその身分にある彼とヨーロッパからの流れ者と

では教養にせよ、感性や品性にせよ、あるいは生活態度やモラルにせよ比較にならないのであろう。それでもここに自分の立場の微妙さを意識しないかのごときロティのあの独善的なエリート意識を再び見出すことができるのではないだろうか。

さて、ことに後半において顕著になる解説的な記述に続いて、初日の宿泊のことが話題となり、情景の描写がくる。作品中の魅力的な、少なくとももっとも印象的な件のひとつである。

僕らの最初の宿泊地はパパラだった。一日中歩いた後、僕は陽の沈むころそこについた。土地の漁師たちが、張り出し浮き具つきの細い丸木舟に乗って沖合からもどりつつあった。地区の女たちは浜辺にあつまって男たちをまっていた。罾わづの申し出に対して、僕は選ぶのに困るばかりだった。ほっそりした丸木舟は、一艘また一艘とココ椰子の樹の下に接岸した。裸の漕ぎ手たちは静かな水面を櫂でおおきく打ち、古の海神トリトーンのように法螺貝を音たかく吹き鳴らすのだった。それは、さながらこの世の初期の情景でもであるかのように生き生きして風変わりで、単純にして原始的だった。(同上)

いくつかのテーマないし意味論の束とでもいうべきものを指摘しよう。

まずもちろんエグゾティスム。それは真先に語彙によって示される。Papara (パパラ)、pêcheurs indigènes (現地人漁師たち)、pirogues à balancier (張り出し浮き具つきの丸木舟)<sup>43</sup>、cocotiers (ココ椰子の木)、rameurs nus (裸の漕ぎ手たち)、trompes en coquillage (法螺貝のラッパ) などである。そしてこれら全てがもっぱら漁師たちの帰還の情景をえがく要素となっている。

ところでこのパラグラフは二つの要素から構成されている。ひとつは「主人公」であるはずの「僕たち」の行為で、その記述は最初の1文(翻訳では2文章)および罾の提供をうけたことに関する単純過去による部分に限られている。それ以外はすべて半過去で記述される日没時のパパラの情景である。僕らに関する事柄よりは、状況の描写の方がはるかに重要なのである。ロティは宿の選択についても、話題になってもおかしくないその家の人々との交流についても、夕食や就寝についても全く何も語らない。この集団の生活の断片に比べれば、書きとめる価値はないというのであろう。先に指摘したロティの小説の全体的な傾向、一貫した物語という性格の弱さがここでは筋構成の細部に現れているのである。それともしかし、大胆な空想が許されるなら、このパパラでの宿泊はもしかしたら漁民の情景を、それも何らかのイメージにもとづいて描くための虚構ではないのか、と問うべきかも知れない。それほど事件性のうすい記

述である。場面はまるで一幅の絵ないし写真—絵葉書—を思わせるではないか。

他方、直前の段落は「黄金時代」とか「太古の時代」という語句によって、人類の途方もない過去に対する憧憬を表現していたのだが、今読んだ件でも、それは「この世の最初期の一場面」という直喩が反復している。更には同じく直喩によってギリシア神話を思い出させる。悲哀を抱えてあるいはそれに抱かれて旅する人は、こうしておそらく一生同じ行事を繰り返して生活している民、永遠を思わせる民のうちに類まれな美と幸せとを発見するのである。

悲しい現在を逃れて過去に回帰する願望か。確かにロティには少なくとも一瞬は異国に定住する思いもよぎる。ティアフイのところで滞在のあるとき(上の件の数ページ後)、ロティはこう書いている。「場合によっては僕が自分自身を現地人とみなすのを妨げるものは何もなかったし、時にはじっさいにひとりの現地人でいたいと望んでいる自分にふと気づくこともあった」(I, xii, 185)。そしてララヒュと二人で島のどこか辺鄙な場所であるいは遠い別の島でひっそりと生活することを考えたりもする。けれどもその「常軌を逸した企て」(II, xxxv, 205)は決して真剣な計画とはならない。一瞬の思い付き、夢想である。もしくは読者への思わせぶりに過ぎないのである。同じように、兄の遺児のことが問題になり始める文脈で、ララヒュと自分との子でもあれば自分でもある子供としてタヒティで生きてゆければよいだろうにという奇妙な思いがよぎることもある(II, xlvi, 215)。だがこれも一過性の単なる夢想にとどまる。ロティは、ララヒュと自分とのあいだに、ましてや他の原住民と自分との間に絶対にこえられない相違、先にララヒュが感じ始めたと言ったあの文明の「深淵」(3.1)があることをわきまえているのである。パパラの日は没は要するに一幅の遠い情景、幻を思わせる絵に過ぎない。

#### 4. 2. 亡び行く民

ポリネシアの民は幸せに生きているのか。ロティはそうではないと感じている。それどころか、彼はこの民が脆くはかなく、亡びつつあると信じて疑わない。いわば「タヒティペシミズム」。これまた『ロティの結婚』でしばしば現れるテーマのひとつである。今読んだ永遠の漁民のイメージに続く部分で、道をたどりながら、ロティは物思いに沈む。

不思議な運命だ。これらポリネシアの土民たちの運命は。それは原始の人種の忘れられた名残のように見える。彼らはあそこで、動くことなく瞑想しながら生きている。開花した人

種と接触することによっておもむろに滅びて行く。一世紀後にはおそらく消滅していることが分かるだろう。(II, x, 184)

先に見たあのヨーロッパの「愚かな植民文明」の到来のテーマ(1. 2)の回帰である。タヒティは西欧文明との接触到に耐え得ないだろう、それによって亡びるだろう、という。民やその伝統の衰弱を予感する一般的な指摘のほかにも、「美しい国が売春の場へと墮落していく」(II, xxiv, 196)とか、彼がどうにか話しているタヒティ語すら「話されなくなるだろう」(II, xv, 188)とロティはノートしている。さらに登場人物にかかわるいくつかの具体的な事例をあげることができる。たとえば王家のデカダンス—堂々たる体格をもちながらアルコール中毒の女王の夫、同じ中毒でかつ凶暴なため幽閉されている王太子、結核で死んでゆく世継ぎの王女、そもそも自分ひとりて用を足すこともできない女王の「ぶざまな塊」(II, xxv, 195)といわれる肥満—、これら全てが民の不吉な運命の徴候なのである。そして恋人ララヒュの空咳に言及する章を、語り手はこう結んでいる。

彼女はポリネシア人種のささやかな心打つ悲しい擬人化であった。この民は僕らの文明や悪徳との接触によって消えて行きつつあり、まもなくオセアニアの歴史におけるひとつの思い出でしかなくなるであろう。(II, xxxv, 206)

## 注 釈

### I

- 1) Claude Gagnière, « Pierre Loti ou le désenchantement », Préface de *Aziyadé, Le Mariage de Loti, Le roman d'un spahi, Mon frère Yves, Pêcheur d'Islande, Madame Chrysanthème, Ramuntcho, Les désenchantées*, Coll. « Omnibus », Presses de la Cité, 1989, p. vii. 作品の参照はこの版による。なお『ロティの結婚』の日本語訳には津田穰訳、岩波文庫(昭和12年)、第5刷(昭和16年)がある。
- 2) C. Gagnière, *ibid.*
- 3) « Chronologie », in Pierre Loti, *Voyages (1872-1913)*, éd. établie et présentée par Claude Martin, Coll. « Bouquins », R. Laffont, 1991, p. xlviii. ちなみに『ロティの結婚』においてと同じように、『アジャデ』の主人公はすでにロティであり、これを冒頭で紹介するのもプラムケット(Plumkett)である(*Aziyadé...*, *op. cit.*, p. 9).
- 4) C. Martin, « Chronologie », *op. cit.*, pp. xxxviii-xl.
- 5) Loti, *Le Mariage de Loti*, *op. cit.*, Première Partie, I, p. 135 (以下 I, i, 135 と表記する)。
- 6) もっともテキストには奇妙な細部もある。内容を先取りすることになるが、優れた歌い手であるララヒュの作った歌—去っていった恋人の不在を嘆く哀歌—の終りに、「あなたは去っ



た、恋人よ、フランスの地に向かって」(Ⅱ, xxxiii, 203)なる一節が現れる。ロティとの避けえない別れを知っているヒロインは、自分の運命をあらかじめ歌ったと解釈できるのであって、この突如の「フランス」の介入は「Farani」を「Peretani」(≪ Britain)と書き直すことを忘れた虚構作者の不注意によるとしか説明できないだろう。

7) C. Martin, « Chronologie », *op. cit.*, p. xl.

8) この作品の渡辺一夫訳は『アフリカ騎兵』(白水社、昭和26年)となっている。

9) 『アジヤデ』の主人公であり、しかも作品中で死ぬ登場人物の名に由来する筆名の奇妙さにバルトは注意を喚起している (R. Barthes, « Pierre Loti, *Aziyadé* », in *Nouveaux essais critiques* (1972), *Œuvres Complètes*, t. II, Seuil, 1994, pp. 1401-1402).

## Ⅱ

10) C. Gagnière, « Pierre Loti ou le désenchantement », *op. cit.*, p. ii.

11) Barthes « Pierre loti, *Aziyadé* », *op. cit.*, pp. 1402-1403.

12) Georges Grant. 一見奇妙な名である。イギリス人なら George であるべきであろう (cf. George Sand). 作者は、当時の習慣にしたがって固有名も英語から仏語へと翻訳しているのである。

13) ヴィオの兄ギュスターヴの死については C. Gagnière, *op. cit.*, p. iv 参照。

14) B. Vercier, A. Quella-Villéger et G. Dugas, « Du Roman d'un enfant au Journal d'un adulte », Préface à Pierre Loti, *Cette éternelle nostalgie — Journal intime : 1878-1911*, La Table Ronde, 1997, p. 12. 原文における大文字の « Journal » は太字で日記と表記する。〔 〕は筆者の注記。なお「四つに折られた」(pliés en quatre) とは一度折って4ページを作ることであろう。ほぼA4の2分の1というすでに細かな用紙をそれ以上折るならば、ファイルに揃えることは物理的に至難になる。

15) C. Martin, « Introduction » à *l'Île de Pâques : Journal d'un aspirant de La Flore, Voyages*, *op. cit.*, p. 3.

16) J. Viaud, cité par C. Martin, *op. cit.*, pp. 3-4.

17) Loti, *l'Île de Pâques*, *op. cit.*, p. 21.

18) C. Martin, *op. cit.*, p. 4.

19) Loti, *op. cit.*, p. 7. ロティは、当時の自分の幼さ、未熟さを強調している。引用文中の次の表現に注目しよう : dans ma prime jeunesse, petit aspirant de marine, avec beaucoup d'incohérence et d'enfantillage, journal d'enfant.

20) 詳細については拙論「タヒティの老人はどのように語ったのかー『ブーガンヴィル航海記補遺』の手法」、山口大学『独仏文学』第26号、2004年、pp. 163-191参照。

21) アリストテレス『詩学』、藤沢令夫訳、世界の名著『アリストテレス』、中央公論社、第6版、1994年、p. 340. 原訳文における強調点は太字に変更。次の引用についても同じ。

22) 単純過去による文章。同じ時制で書かれた I, ii, 136は「プラムケットの思い出によるラヒュの伝記覚書」という標題をもつ。なお I, iii, 136「社会経済」は彼女のタヒティ本島への移入の指摘から始まっていて、論旨は ii に接続する。よってハリー・グラント自身の文章は I, iv, 137から始まると理解される。

23) 日本文学史において紀行文はかつてしばしば「日記」とよばれた。日記の一種だったのである。稲田利徳「中世日記紀行文学の諸相」、『中世日記紀行集』、小学館、1994年、pp. 3-5 参照。

- 24) 森岡、徳川、川端、中村、星野編『国語辞典』、集英社、1993年、935-936頁。  
 25) 同上、729頁。  
 26) C. Martin, « Chronologie », *op. cit.*, pp. xxxvii-xl.  
 27) 津田穰訳『ロティの結婚』の「あとがき」、上掲書、287-288頁による。  
 28) なお、津田穰氏は第三部の内容はほとんど「二回目のタヒチ滞在の... 日記の再録である」という(同上)。  
 29) Loti, *Japoneries d'automne* (『秋の日本さまざま』、1889年所収) ; in *Voyages, op. cit.*, pp. 110-147.  
 30) C. Martin, « Introduction » aux *Japoneries d'automne*, in *Voyages, op. cit.*, p. 83.

### III

- 31) « Là, tout n'est qu'ordre et beauté, / Luxe, calme et volupté. » (Baudelaire, *Les Fleurs du mal*, LIII : « L'invitation au voyage », *Œuvres*, La Pléiade, Gallimard, 1934, p. 66.  
 32) Cf. C. Gagnière, « Pierre Loti ou le désenchantement », *op. cit.*, pp. i-xvii. なおロティ自身の表現 : « désenchantements amers » (IV, viii, 251), « une expression ... de désenchantement, d'amère tristesse et d'ironie » (II, xxxiv, 204) 参照。  
 33) 他でもこう白状している。「僕はもうほとんど何も書く気がしない。僕をとりまく事柄はますます普通のことと思えるのだ」(Loti, *Au Maroc* (1889), in *Voyages, op. cit.*, p. 262).  
 34) Loti, *ibid.*, p. 225.  
 35) Cf. P. Emmanuel, *Tristesse ô ma patrie*, Fontaine, 1946.  
 36) « des trompes en coquillage ». セガレンによるデッサンと同じ類の民族楽器であろう。V. Segalen, *Les Immémoriaux*, Coll. « Terre Humaine », Plon, 1982, p. 37 ; 拙訳『記憶なき人々』、国書刊行会、2000年、56頁参照。  
 37) Gogh, *Lettre à sa sœur* (1888), citée dans la « Préface » du *Mariage de Loti*, éd. Garnier-Flammarion.  
 38) Loti, *Le Mariage de Loti, op. cit.*, I, ii 「プラムケットの思い出によるララヒュに関する伝記覚書」, p. 136. とはいえ『「日記」では色々の土人の女の名に出會ふが、ララフはゐない。ララフといふ名は、どうやらロティの數數の女性に對する追憶を一人で擔うてゐるやうに思はれる。結局、ララフはタヒチ女性の象徴である。』(津田穰『ロティの結婚』「あとがき」、上掲書、288頁)。  
 39) 西川長夫「フランスの明晰とは何か—言語と精神」、饗庭孝男編『フランス六章—フランス文化の伝統と革新』、有斐閣、昭和55年所収、p. 54.  
 40) Diderot, *Supplément au voyage de Bougainville*, in *Œuvres Complètes*, t. XII, Hermann, 1989, p. 587.  
 41) Le Centre d'étude du XVIIIe siècle (J. Proust), « Notes » sur le *Supplément ...*, *op. cit.*, p. 587.  
 42) タパは女性の身体に巻きつける布 (cf. Segalen, *Les Immémoriaux, op. cit.*, pp. 50-52). パレオは男女の腰巻きの種類。  
 43) « balancier » (英語では « outrigger »)。片山一道『ポリネシア人—石器時代の遠洋航海者たち』、同朋舎、1991年、p. 30参照。筆者はその形態および機能を考慮して「張り出し浮き具」なる訳語を提案している (『記憶なき人々』、上掲書、p. 14参照)。